

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1790100240		
法人名	社会福祉法人 中央会		
事業所名	グループホームゆうけあ相河 貳番館(2Fひびき)		
所在地	石川県金沢市西泉6丁目135番地		
自己評価作成日	令和2年12月22日	評価結果市町村受理日	令和3年3月31日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人バリアフリー総合研究所		
所在地	石川県白山市成町712番地3		
訪問調査日	令和3年2月5日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

法人の理念である《「家」のぬくもり「家族」のつながり「地域」のつながりのある暮らし》を根底に建物には和風な外観と内装。「和」にこだわった設えにしています。居室の障子越しに朝日が差しこみ、夕方には格子戸越しの温かみのある陰影が懐かしい落ち着いた空間を提供しています。《入居者様と温かみのある笑顔の絶えないグループホームを創る》を事業所目標として入居者様一人ひとりの思いに沿ったケアを目指しています。季節ごとのイベントやバイキングなど楽しい食事の企画なども行っています。入浴も車いすでの入浴、ケア浴、一般浴とその方の状態に合わせた浴槽で安全安心な入浴ができます。健康面では看護師が連携医療機関と連絡を密に安心した生活を提供出来ます。重度化した時の対応についても隣接の特養や同法人の病院との連携により不安なく過ごして頂けると思います。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

・法人理念の具現化に向け、実現可能な具体的ケア目標をホームとして掲げ、職員もまた半年毎に個人目標を立て、利用者がいつも「家」のぬくもり感じ、「家族」や「地域」とつながりある暮らしとなるよう取り組んでいる。
 ・コロナ禍の今年度、利用者の好きな料理や旬物が並ぶバイキングをしたり、ホーム内に駄菓子屋を模してのお買い物を楽しんで頂いたり、家族に面会制限をお願いしつつもテレビ電話や越し面会で利用者や交流して頂き、運動会や文化祭等の地域行事に法人行事も中止を余儀なくされている中、小学校からビデオレターや手作り作品を頂けるなど、利用者が少しでも多く家族とのぬくもりや、地域とのつながりを感じられるよう取り組んでいる。
 ・救急病院が母体であり医療連携が万全であり、各委員会活動、事業所間の相互支援、地域貢献等を組織的に行い、財務内容や顧客満足度調査結果もホームページで公開するなど、透明性の高い堅実運営がなされている。
 ・法人グループとして利用者の終焉まで支援する姿勢で、同一敷地内の特養をはじめ多数の介護事業所と日頃から利用者・家族・職員同士が交流を持ち、重度化しても不安なく法人病院や特養に移行できるよう図っている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～59で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
60 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	67 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
61 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,42)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	68 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
62 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:42)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
63 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:40,41)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
64 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:53)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	71 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
65 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	72 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
66 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ミーティングや研修などにおいて施設理念の理解を深めている。また、事業所目標を決めるにあたって、理念に沿った内容で、具体的な内容の目標を事業所職員全体で決めている。	理念『利用者が「家」のぬくもりを感じながら、「家族」や「地域」とつながりのある暮らしの実現(要約)』の具現化に向け、「温かく笑顔の絶えないグループホーム」「ケアの質の向上に向けたミーティング」「職員個々のレベルアップ」は、昨年度末に全職員で検討した今年度の事業所目標。また職員も個別目標を立て、半年毎にその評価と次目標を掲げて臨み、理念の共有と実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	オープン時の内見会にはご近所の方や地域の方々に来所頂き、式番館を知って頂くきっかけは作れた。例年は様々な地域の行事に参加したり、出かける機会があり交流出来たが、今年はコロナ禍の為、ゆうけあ相河の夏祭りも中止となり外部の方をお招きすることも外出も難しくなった。小学生との交流の代わりにビデオレターと作品が届き楽しまれた。また地域の一斉清掃への参加や、消防訓練に地域の方に来て頂けた。	通年、敷地内の複数の法人事業所が合同で、婦人会や多数の地域の方々の協力を頂きながら開催している夏祭りをはじめ、地域行事の運動会や文化祭等も、コロナ感染予防のため中止となったが、職員は地域の一斉清掃や消防訓練等で地域の方々と交流することができている。また毎年慰問して頂いている小学校から、歌や演奏、コマ回しやおはじき遊び等のビデオレターをお手紙や折り紙作品とともに届けられ、来年を楽しみに待つことになった。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	例年は地域の文化祭に介護フェスタと銘打って相談コーナーを設け職員が地域の方にアドバイスをしたり、オレンジカフェに出向き、グループホームについてお話ししたり、認知症の方との対応についてお話しする機会を設けていたが、本年は開催できなかった。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回運営推進会議を行っている。行政の方や地域の方、ご家族に参加していただき、コロナ対策や消防訓練、日々の事業所活動について、事故や苦情の報告を行っている。その中で参加されている皆様のご意見や事業所や職員に対する要望、ご利用者様のご家族の感想などを聞き、サービス向上につなげている。	会議は隔月に、ホーム単独または同敷地内の法人事業所との合同開催のほか、市中のコロナ感染状況を見て入居や活動状況の報告書を送付する書面開催で実施している。構成メンバーは家族代表、町内副会長、民生委員、市・包括職員、事業所側職員で、今年はコロナ対策や避難訓練等をテーマに、ホームの実情をお伝えするとともに地域情報や支援協力の打ち合わせをさせて頂いている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	グループホーム新規開設にあたって、加算や基準について相談や確認を密に行ってきた。コロナ感染症対策においても市からの情報に沿って面会や会議開催などやケアについて行ってきた。市の実地指導では解釈や足りないことなど教えていただくことができた。	市には、運営推進会議でホームの実情をお伝えし、また家族の疑問や質問にも直接対応して頂いている。当ホームは昨年度末に新規開設しており、運営指導をはじめコロナ感染防止や運営推進会議開催の指導を順守し、マスクや消毒液の供給も受けている。今後も齟齬や誤認無きよう良好な協力関係維持に取り組む方針である。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関のみ夜間施錠はしているがそれ以外は、各居室、共有スペース、日中の玄関は施錠はしていない。身体拘束についても施設内研修やグループホーム独自の身体拘束の研修を行っている。	身体拘束の正しい理解は、法人の年間研修計画のテーマに毎年組み込まれ、身体拘束委員会による研修や、外部講師による抜き打ち現場視察を委託して、その共有と浸透が図られている。またホーム独自でも、管理者、ケアマネ、ユニットリーダーが中心となり、初歩的なことから日頃ついでに出がちな抑制的な言葉も含め、都度、その現場での注意や別途に省みる機会を設けて、正しいケアの醸成化に取り組んでいる。日中の玄関施錠もしていない。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止については施設内研修やグループホームでの研修もしている。職員がどんな時にストレスを感じるか、どうやってストレスがかからない取り組みができるか話し合っている。アンガーマネジメントについても研修が行われている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	施設内研修において権利擁護を学び、理解するようにしている。個々で必要な場合は社会福祉士や上司にアドバイスを求め対応している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	ご家族様、ご本人に契約書、重要事項説明書、料金や加算についての別紙を読み上げ説明し、疑問な点はその都度お答えしている。預かり金管理や広報写真掲載、訪問診察、重度化した場合の対応についての同意書も納得された上でサインを頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議にご家族に出席していただきご意見ご要望をいただいている。面会時に近況を伝えたり、変化があったときに随時電話で報告した時などにもご意見ご要望をお聞きしている。いただいたご意見、ご要望は職員で共有し、改善に向けて取り組んでいる。	利用者・家族の意見の反映は、理念の具現化の最優先課題であり、法人の苦情委員会では毎年満足度調査をし、その結果も毎月の便りや運営推進会議、ホームページで公開しているが、コロナ禍のため思うに任せない状況である。面会制限が続く中、テレビ電話の活用や窓越し面会、天気の良い日はバルコニーからの面会も実施して、訪問時や電話連絡時に、利用者の近況やヒヤリハット事例などを包み隠さずお伝えし、信頼関係の構築に努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	個別に目標管理シートを記入したうえで、面談を半年に1回行い、個々の意見や思い、どうありたいかを聞いている。また全体ミーティングやユニットのミニミーティングにおいても意見や提案をすくい上げ、実現に向かってどうすればいいのか共に考えている。	職員からの意見や提案は、毎月のユニット会議や随時開催のホーム全体会議の場があるが、通常業務中でもアイデア等を聴きいつでも反映させられる環境で、コロナ禍の今、家族向けに個別にお便りを送ることや、花火大会、七夕等行事についても工夫を凝らした提案を受け、皆で取り組んでいる。職員個別の目標管理シートは、職員自らがケア姿勢や介護技術の向上を個別に目指すもので、半期毎の管理者との個別面談ではその評価と次目標の参考となり、職場環境改善や就労意欲向上にもつなげている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	就業規則に各項目は明記されており、法人のキャリアパスに応じて人事考課を行っている。職員育成レベルチェックリストを各人が半年ごとにチェックし、向上に向けている。同時期に行われる、管理者と個人面談で、個々の不満や不安に思っていること、希望など思いを聞き、職場環境の改善をできることは実行し、働きやすい職場を目指している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設内研修や施設外研修、新人研修などそれぞれのレベルに見合った研修を受講できる機会を設けるように調整している。日々のケアの中では新人に対してチューター制度を設けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	従来はグループホーム部会での訪問や実践者研修や認知症リーダー研修での他の施設訪問ができていたが、今年はコロナ禍の影響もあり、交流は難しいものがあり、情報の交換により日々のサービス向上のヒントとさせていた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご家族や前にご利用しておられた事業所の情報を共有しながら本人様の声に耳を傾け不安や不満を安心に変えていけるように入居当初はかかわりを多く持つようになっている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	見学や申し込み時からご家族の困っていること不安を聞き、契約時にはそれに加え要望をお聞きする。まだ自宅で見なくてはいけなかったのではという思いや離れの心配などご家族の思いを察し、入所初期はご様子をこまめに伝え安心していただけるようになっている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	申し込み時にはご家族と本人様の状況をお聞きした上で、他にどのようなサービスを使い、問題が解消されるのか情報提供している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者様を年長者として敬う心をもって接し、それに応じた言葉遣いをするようになっている。接遇の研修も行っている。入居者様のそれぞれ素晴らしいことや生きてきた姿勢に学ぶことはたくさんあるとらえている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族様には面会や電話が入居者様にとっては喜びとなっていることをお伝えしている。コロナ禍で新しく利用を始めたテレビ電話についても面会と変わりなく生き生きとお話されている。ご家族様と入居者様のお話のやり取りや、職員とご家族様の来所時や報告の電話での会話の中からケアのヒントを頂いたりしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	手紙での文通や電話での会話、テレビ電話の活用などで馴染みの方とのつながりを継続されている。同一敷地内の特養に入居されている御姉様への面会時には、両事業所の職員はお二人の状況を見て状態のいい時に面会にお連れしている。	面会制限が続く中、携帯電話で家族と会話される方、テレビ電話でご子息以外にお孫さんも加わり賑やかな会話となった方、年賀状を家族や兄弟、親戚に加え近所だった方にも出されている方、また古くからずっと友人との文通を続けている方もいる。隣接の特養施設に入所している姉と体調が良い時にロビーで面会されている方もいるなど、それぞれ馴染みの人との関係が続くよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合う方合わない方を見極め座席の調整を行っている。トラブルが起きたときもその対応を早めに講じるようにしている。会話が弾むような話題を職員が提供し孤立しないように目配り気配りを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居された方においても介護施設の利用や介護保険について必要とされる時には情報提供など行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	事前の情報を頂いたうえでご家族様からお話を聞き情報を共有している。信頼関係ができたところでその方との会話の中やその方の行動から思いを受け止め意向や希望の把握に努めるようにしている。	利用者の気持ちは、ケア中の会話をはじめ、テレビを見ている時の何気無いつぶやきや利用者同士の会話など、普段の関わりの中で、人柄や思い、暮らし方の希望を把握するよう努めている。なかなか思いや意向がわかりづらい方には、何かを尋ねたらとてもいい笑顔を見せられたり、沈んだ表情をされたり、進んで何かをされた時などに、本人の立場にたって推察するよう取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ケアマネからも入居前の情報収集し、契約時にご家族に此处に至るまでの経緯をうかがっている。その後ご本人からもうかがうようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居当初はADL表に昼夜職員全員でその方の状態注意事項などを記入していき、カンファレンスを行い有する力等見極めていく。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	担当者会議や面会時、毎月のカンファレンスにおいて、ご家族様や職員、ご本人様とお話しの中から意見や要望をすくい上げ情報の共有化を行っている。現在の状況にあったケアプラン作成に生かしている。	計画は、前計画の評価と本人・家族の意向をもとに、担当職員、ケアマネ、管理者、計画作成担当者による会議を開き、その結果を踏まえ、ケアマネが半年毎に更新作成し、家族訪問時にその説明と承諾を取っている。健康維持管理に加え、お手玉を作りたいとの希望に、実際に布を買って縫って頂き、完成したお手玉で皆で遊ぶ事を目標にするなど、本人が望む暮らしぶりを計画化して、その実現に向け皆で取り組む計画もある。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録に今までとは違って見えたこと、実際に行ったこと、気づき、個々の方の様子を細かく記入している。毎月のモニタリングを評価表に基づき話合い情報の共有化を図っている。その話し合いにおいてケアプランを見直している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	画一的なケアではなく、一人ひとり、に合わせ、また、その方の状態の変化により、ケアも変化していくものと捉え柔軟な目線と考え方をもち職員全員で話し合っており、必要なケアの提供を行う様に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源として公民館や小学校、幼稚園、地域の方々やボランティアの方々と交流をもつことで生きがいを感じたり、楽しみを見つけることができると考えているが例年のような交流は今年度は難しくなっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医については従来のままでも、往診に変更されてもよいとお伝えしている。入居者様の状態やご家族の環境の変化によりご家族での定期受診が難しくなってきた場合は訪問診察に変更することもできるとも伝えている。	法人病院からホーム提携医として、代表者自らが4週おきに訪問診療に来ているが、主治医選定はあくまでも本人・家族の意向で決めている。入居前から継続の医療機関への通院や、内科以外の外来受診は基本家族付き添いだが、職員がお連れして家族と病院で待ち合わせをするなど、緊急時を含め柔軟に対応支援をしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職は日々の中でいつもと違うと感じたときには看護師に早めの報告と相談を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は看護師や介護職からの情報提供を速やかに行っている。連携病院の電子カルテにより入院時の情報の共有は出来ており、連絡も密にとることができている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所までできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化の指針については契約時予めご説明は十分に行っておりご家族の考えをお聞きするようになっている。重度化された場合は詳しく速やかにご家族に報告し、今後について連携病院や連携事業所などの情報提供を行っている。病院、看護師間との連絡も密に行っている。それによりご家族の不安軽減がなされるようにと支援に取り組んでいる。	開設もないため、現在、該当利用者はいないが、半年毎のケアプラン更新時に嚥下・座位・入浴困難等、重度化に該当する利用者が出た場合は、当該家族に、その状況と、特養や病院を有する法人グループとして最後まで支援する姿勢を改めてお伝えするとともに、施設見学や施設職員との交流や、法人病院との連携を緊密に取りながらいつ悪化しても本人・家族が不安なく移行できる旨を、入居契約時に説明し承諾を頂いている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故については施設内研修を行っている。現場にはフローチャートも用意しマニュアル化されている。心肺蘇生については消防訓練時にダミー人形で訓練を行っている。職員全員が対応できるよう訓練は受けている。		
35	(13)	○緊急時等の対応 けが、転倒、窒息、意識不明、行方不明等の緊急事態に対応する体制が整備されている	それぞれの場合に応じた施設内研修と、マニュアルを作成してある。その場合の連絡についても看護師と上司に速やかに報告することになっている。	転倒、誤嚥、窒息について事例をどのような手順でするかを検討する研修会があり、避難訓練時にも消防署員によるダミー人形を用いた救急救命講習を実施し、適切な緊急時対応・対処ができるよう実践力を高めている。事務コーナーには法人病院看護部に報告する際のチェックリストや対応マニュアル、フローチャートを配し、日頃マニュアルの読みみやヒヤリハット報告を義務付け、再発防止を図っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36	(14)	○バックアップ機関の充実 協力医療機関や介護老人福祉施設等のバックアップ機関との間で、支援体制が確保されている	オンコールナースには夜間も連絡可能であり、協力医療機関とは連絡体制が整っている。同一敷地内の各事業所同士、協力医療機関と各事業所、各々連携が取れており、職員の交流もあり、入居者様の身体状況や環境に合わせた支援ができています。	近郊に法人母体の救急病院があり、365日24時間対応とともに法人グループの福祉事業所担当看護師もいる。また敷地内には特養、通所、ショートステイ、小規模多機能、居宅支援の福祉事業所があり、日頃から事業所間で職員のみならず利用者・家族も含めた交流を持ち、医療・福祉にわたり支援や連携がとれる体制を整えている。	
37	(15)	○夜間及び深夜における勤務体制 夜間及び深夜における勤務体制が、緊急時に対応したものとなっている	各ユニット1名ずつの夜勤者は事前に入居者様の情報を共有しており、協力して緊急時の対応に当たることになっている。オンコールは24時間体制で入居者様の状態が悪い時など指示を仰ぎ、対応している。	夜勤者両ユニット1名ずつ計2名の夜間体制で、夜勤前には両ユニット利用者の日中状況を把握し万全を期すとともに、深夜も夜勤者間で定期確認をしている。不測や緊急事態には、法人救急病院や敷地内の特養にも宿直者がおり、適宜連携が確保される体制となっている。	
38	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災や各種災害に備えた避難訓練は昼夜両方の想定で半年に1回行われており、搬送訓練も行われている。春には消防署員立ち合いでの訓練となっており、地域の方や包括支援センターの方にも出席していただいている。福祉避難所として特別養護老人ホームに登録されており職員は設営訓練に参加している。	年2回の避難訓練(うち1回は消防署立ち合い)は、毎回火元や日中夜間の時間帯を変え、火災想定は2階から1階へ、水害想定では竿と毛布の簡易担架や職員2人で抱えて2階に退避する搬送訓練を実施し検証している。運営推進会議参加者や地域の方々からも講評を頂き、終了後にはAED等の救命講習や消火訓練も実施している。また、福祉避難所として指定を受けている特養施設による段ボールで間仕切りやベッドを作る設営訓練にも参加している。	水害対策として、ホームではホームに近接の土手の水位によって1階から2階に退避することを取り決めており、また地域に多数いる防災士の知恵もお借りして、地当当ホームに即した現実的な独自マニュアルを作られることを期待したい。
39	(17)	○災害対策 災害時の利用者の安全確保のための体制が整備されている	備蓄食品水も3日分備えてあり、他にヘルメットやペンキなど備えてあり、リスト化されている。災害時には職員に一斉メールが配信される。メール配信のテストも日ごろ行っている。	ライフラインリストや役割分担等を記載した敷地内全事業所を対象とした防災マニュアルを整え、水、缶詰、ご飯等の備蓄品も3日分を備え消費期限を含むリスト化管理をし、救護用品等の防災品は隣接特養施設にあるが、ホーム1階でもヘルメット等の防災品を配備している。災害時の全職員への一斉メール配信体制の充足として、適宜に確認メールを送信している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
40	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者様を尊重し、敬い、声掛けのトーン言葉遣い態度などを接遇研修で学び日ごろから職員同士でも気づいた時には注意しあっている。接遇の外部講師の方も定期的に現場をラウンドして下さり、実行できているか、確認していただいている。	法人の年間研修計画のテーマに「接遇」も毎年組み込まれており、どんなに親しくなってもどんな場面でも敬称・敬語をおろそかにせず、黙って車椅子の向きを変えない・動かさない・身体に触れない等の基本的な事も含め、高圧的であったり、軽んじたり、子供に話しかけるような言い方・傾向があればその場で注意をして、正しいケアの浸透を図っている。また外部講師による抜き打ち現場視察もあり、その指導も醸成化の一端となっている。	
41		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	会話の中やそのかたの表情、行動から思いを受けとめいろいろな場面での選択ができるようにしている。		
42		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員の業務のペースに決して合わせるのではなく起きる時間食事時間就寝時間など一人ひとりご自分のペースで暮らしていただいている、したいこと希望など聞いて実現に向けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節や気温その日の気分に応じて一人では更衣が難しい方にはお手伝いし、自立している方にもさりげない声掛けを行っている。とかくお気に入りの洋服をいつもそばかき着てしまいがちになる傾向で、ご家族が新しく購入された服などはさりげなくおすすめるように配慮している。		
44	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	芋のツルや、ずいき、かたはなどの山菜を、職員が入居者様に教えていただきながら昔話に花を咲かせて一緒に下準備や調理を行っている。テレビで見たメニューをリクエストに従ってすぐに食卓にあがることもある。バイキングや季節の行事食、旬の食材の登場など心がけている。個々の方の状態に応じて下膳や、食器洗いもお手伝い頂いている。	献立は、利用者の嗜好や旬物を主体に食材は地元スーパーで購入し、一緒にする下準備がレクリエーションになることもある。テレビで見た料理を再現したり、人気店からたくさん買ってするパンバイキング、クリスマスや七夕等の行事バイキング、理由は無いが料理をたくさん並べたバイキングなど、感染対策として利用者が指差した物を職員が皿に盛るなどして楽しい食事を演出している。また3時のおやつタイムは職員も一緒に味わっている。	
45		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	ケア表により食事量や水分摂取量を一人ひとり把握している。食べやすい食事形態、嗜好、に合わせ、十分な栄養と食事量を確保できるように努力している。水分不足になりがちな夏や冬場のエアコンによる乾燥には特に注意を払ってイオン飲料を取り入れたり、寒天ゼリーにしたり、飲み物メニューを作成して好みのものを提供している。		
46		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	職員へは口腔衛生管理体制加算として、連携の歯科の先生より毎月口腔ケアの助言指導を頂いており、見守り、自立、介助が必要な方、それぞれ入居者様の毎食後の口腔ケアに生かしている。訪問歯科をお願いし不調なところは速やかに処置していただいている。		
47	(20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	現状を維持できるような支援を心掛けている。入居前は病院で過ごされ、テープ止めのおむつ使用されていた方も排泄パターンの把握をして、二人介助によるトイレ誘導から始め徐々に立位可能になり、リハビリパンツ使用に変わり、現在ではほぼ日中はトイレで排泄できるまでに変化された方もおられる。	1ユニットに一般トイレ5室、多目的トイレ1室の環境で、排泄チェックで個々の習慣を管理しながら、便秘・頻尿等は主治医や看護師に相談して薬剤調整をしつつも、食事量や牛乳・ヨーグルト・ヤクルト・寒天ゼリー等の活用、体操等々、日々の暮らしの中で自立排泄向上や維持に向け、個別支援に取り組んでいる。病院からテープ止めオムツで入居された方が次第に居室からリビングで過ごされるようになり、食事量も増え体重も増加した方もいる。	
48		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	体操や歩行訓練など運動を取り入れている。牛乳、ヨーグルト、ヤクルトも効果が見られている。水分摂取が少ない場合は寒天ゼリーを作ったり、飲み物メニューを作りお好きなものを提供し、水分摂取に努めている。		
49	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本は週2回は入浴されているが、気がすまない時は変更し、別日にお声掛けする。朝一番のお風呂が好きな方、午後からが好きな方等、人員と行事予定に支障がない限り考慮している。シャンプー等も本人希望の物を使用している。浴槽は一般浴や跨ぐ必要なく座面が下がるケア浴、座位が不安定で移乗が困難な方は車いすで入浴できる機械浴等個別に使用している。	入浴は何曜日でも、時間帯も朝9時頃から16頃までの間、その日気がすまない場合や朝一番が好きな方、午後からが好きな方々、個別の希望に出来るだけ応じており、入浴好きで自分で入る日時を決めている方もいる。週2回以上を目安に1日3人程が入浴されており、希望の洗髪剤や液体石鹸にも応じ、湯は使用毎に張り替え、また2階浴室は座った状態から、1階は車椅子から無理なく浴槽移動ができる浴室となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自宅から持参された枕とお布団でゆっくりその方のペースで休んで頂いている。居室にはエアコンや照明のリモコンがあり使用できる方には快適温度で、ご希望の電球色で過ごしていただいている。できない方にも職員は希望を聞き調節している。内鍵をかけられるようになっており、それぞれ必要に応じて使用されている。		
51		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤情報は個別ファイルに綴じてあり、いつでも確認できるようになっている。薬に変更があれば、速やかに申し送り事項に入力し情報の共有に努めている。早番と夜勤者の1日分の薬チェックや遅番での翌日分の薬セットなどでも職員各々が薬の理解を深める機会となっている。		
52		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	事前の情報やご家族からの聞き取りから生活歴や趣味、嗜好など把握していることと、日々の会話の中からキャッチできた、ご本人様の今したいこと、今の気持ちとずれがないか確認しながらカンファレンスで話し合い、支援するように心がけている。		
53	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍では外出に制限がかけられ、いつでもどこでも希望に沿った外出できるグループホームの良さが発揮できなくなっている。施設周辺の散歩にも入居者様は喜んでいただいているが、外に思うようにいけないストレスの度合いを個々の方それぞれにおいて見極め、他には何を望んでおられるのか、何ができるかを常に考え、家族様の協力のもと家族様の面会であったり、おしゃれであったり、と模索している。	外出制限の中、それでも花見や近郊へドライブに出かけたり、密を避けマスクを着けて近隣の公園に職員と出かけて頂いている。利用者の希望にそった外出支援は、ホームの最優先サービスでもあるため、やるせない気持ちだが、ホーム内で仮装店を設けて好きな駄菓子等を買って頂くイベントや、ご希望の方にマニキュア塗ってあげるなど、ホームでできる楽しみを模索している。	
54		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金の所持したり使えるように支援している	お金を手元を持っていない方にはご家族と相談し同意を得て本人様管理しておられる。それが難しい方は施設で現金をお預かりしているがこれについても管理の同意書を頂いている。施設で預り金があることを本人様にお伝えしている。相河スーパーと名付けた施設内のお店で菓子など好きなものを買っていただくなどの催しも行った。		
55		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話をお持ちの方で使い方が難しくなった方には使い方の説明を分かりやすく書いたり充電の確認を行っている。古くからのお友達と文通されている方には切手の購入や投函などさせていたいただいている。年賀状を出したいとおっしゃった方にはご家族に購入の許可を得た上で書いていただき県内外の仕分けやあて名書きの確認をお手伝いさせていただいた。		
56	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	全ての居室や居間、廊下には絵画が飾られている。玄関や居間には季節の花を飾り、季節の手ぬぐいを額縁に入れ飾っている。玄関先駐車場には花壇があり、綺麗な花を見て和まれている。その他ひな人形やクリスマスツリー、飾り皿など飾っているが「和」の建物にあった物をと心がけている。エアコンで室温管理し、床暖房も完備し、冬は暖かく過ごして頂いている。感染症対策で消毒や換気も決められたマニュアルに従って行っている。	施設は和風造りで、共有空間には稚拙な装飾を避け、絵画や手ぬぐい額縁、季節花、また居室間には異なる色柄の柱を設けるなど、大人が住む家としての空間を造っている。コロナ禍の今、空気清浄とともに換気や次亜塩素酸による除菌清掃を増やし、面会も事前予約と検温をお願いし、時間制限のもと玄関ホールに限定させて頂いている。リビングで値札を付けた様々な小分けの菓子袋や飲料を並べ、籠を持って買い物をして頂く仮想出店企画では、束の間の外出気分を楽しんで頂いている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
57		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テラスには椅子と、テーブルを置き気の合った方や、時には一人でお茶を楽しんだり、景色を眺めたりされている。居間には大きなソファを置き、ゆったりとテレビを見たり、お話をされたり、一人で新聞を読んだりされている。			
58	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅のタンスや椅子、戸棚など使い慣れた馴染みの物を持ち込んで頂いている。ご本人様の希望を聞きながら、危険のないように本人様の状況に合わせた家具の配置を工夫している。ベッドの位置をどこにおいても大丈夫なように、ナースコールの差し込みやテレビ端子を居室両側に設置してある。布団や枕も自宅から持参して頂くなど、落ち着ける空間づくりに一役買っている。	全室フラットフロアで、電動介護用ベッド、鏡付き洗面台、タンス、2ヶ所のナースコール差込口とテレビ端子、内鍵が備え付けで、希望の室内灯色も選れる。布団と枕は持参で、それ以外の持ち込みも自由となっている。豪華な鏡が付いたキャスター付き棚に化粧セットを持ち込まれている方、居室にこもり俳句作りに執心な方、いつも携帯電話で朝夕ご家族と大きな声で話す方、毎日入念に髭をそらされている方など、自分が落ち着ける場所として自由に過ごされている。		
59		○身体機能を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	入浴は本人様の状況や希望に合わせ、浴槽を跨げない方にはケア浴や浴槽での座位や移乗が大変な方には車いすで入れる浴槽、今まで通りのお風呂に入りたい方には一般浴と出来ることを考慮して使い分けしている。トイレや居室、居間への移動を安全に好きな時に行き来できるように手すりを多くし、居室の目印をつけて迷わないようにし、家具などの配置を考え導線を作っている。			